

あなたがいれば、 まちがかわる

—大ナゴヤ大学の活動を通して感じたこと

会社員
都築 佑那

【つづき・ゆうな】大ナゴヤ大学ボランティアスタッフ。名古屋育ち。実家にはつねに「あずき缶」「つけてみそ・かけてみそ」があった。名古屋の歴史や文化、いまの名古屋で活躍するまちの人などに触れ、名古屋のことを好きと言えるように。コーヒー屋さんとの出会いから、コーヒーや喫茶店が好きになり、時間を見つけては足を運ぶ。ノラ猫の写真を撮るのも日課。ロックフェスに毎年行きたいと思っている。



私の仕事

私は名古屋市内にある外資系工具メーカーで、営業事務として勤務しています。社員数が十数名の規模ですので、基幹業務（営業補佐、電話対応、納期の折衝など）のほか、あらゆる場面で気配りを求められます。備品の購入や産業廃棄物の手配、会議の際には飲み物やお菓子の準備などをする必要もあります。

工場と倉庫が国外にありますので、多様な国籍や文化背景を持った社員とのコミュニケーションは英語で取ります。日本の常識が通じず、驚くこともままあります。そんな時は、お互い様という気持ちで、ねばり強く伝えていくことで少しずつ解消していきます。

大ナゴヤ大学とは

私がプライベートで参加する「大ナゴヤ大学」は、学校教育法上で定められた正規の大学ではなく、NPO法人が運営する市民大学です。2009年9月に開校し、「まちじゅうがキャンパス」「誰もが先生、誰もが生徒」をコンセプトに、「授業」というアプローチでナゴヤのことに触れる機会を提供しています。「ナゴヤ」がカタカナなのは、名古屋市という限られたエリアにとらわれず、参加者と「文化的・経済的に共有する」という想いが詰まっています。

大ナゴヤ大学は「あなたがいれば、カタチ（まち）が変わる。」を活動理念とし、運営をサポートするメンバーにとって、学びの場ともなっています。メンバー自らが授業を企画提案し、そこから実際の授業の開催へとつながっていく瞬間を目の当たりにすると、「あなたが行動したことによって、「まちとの関わり合いが変わった」と実感させられます。

観覧車1周で、私が親善大使に？

私が初めて参加したのは、2009年6月、開校前の「オープンキャンパス」でした。授

業は名古屋市の繁華街・栄にある観覧車に、市内在住の外国人と2人1組で乗り込み、1周15分の間にインタビューし、降車後、みんなの前で発表するというものでした。その名も「ナゴヤのど真ん中で世界一周！」1周15分で、あなたは親善大使！それを聞いた時は「見知らぬ外国人と観覧車に2人きりで乗れたなんて、チャレンジなことするな」と思いました。

私が同乗したのはカリブ海に浮かぶ小さな島国・セントルシアから技術研修で来た男性でした。来日3日目の彼から「セントルシアは日本からたくさん援助を受けているので、日本にはとても感謝している」という話を聞き出しました。「金曜日の午後になつたらお楽しみが待っているけど、月曜日は気が重たいんだ」と聞いた時は、「どこの国でも似たようなことを言うんだな」と思いました（笑）。

観覧車から降りたら、次は私が彼のことをみんなの前で話す番です。15分で聞き取った内容をまとめて、5分で伝えます。準備時間はほとんどなく、さつき聞いたばかりのことをほぼそのままプレゼンしているのに、以前から知り合ってたかのように喋るのは、なかなか気分がいいものでした。

名古屋に外国人が大勢住んでいるのは知っていても、それまで彼らと話す機会はなかったにありませんでした。この授業を通じて、お互いのことを知り、彼らと距離が近くなったように感じられました。

◆ スタッフの「やりたい」を応援する文化

大ナゴヤ大学の開校当時、私は学生で、フェアトレード（公正貿易）の理念を名古屋で広める活動をしていました。その時ある方に紹介されたのが、大ナゴヤ大学の当時の学長・加藤慎康さんでした。さっそく会ってみると、開校前のオープンキャンパスに誘われ、授業に参加しました。そこには、あらゆる世代の色々なバックグラウンドを持っている方がたくさんいて、「面白い！」と直感しました。

開校して今年でまる10年になりますが、私が活動に関わる方法や程度も、自分自身のライフイベントと並行して変化してきました。



「授業では生徒さんとも交流します」（写真中央が筆者）

授業運営のボランティアスタッフから始まり、授業を作るコーディネーター、ボランティアスタッフ同士の連絡係、ボランティアスタッフの募集イベント開催も担当しました。

大ナゴヤ大学には、関わる人それぞれが、「大ナゴヤ大学の活動の中でやりたい！」と思ったことを応援してくれる文化があるので、継続して関わる人も、しばらく活動から離れた後に再び戻ってくる人もいます。この距離感が居心地の良さを生んでいたりと、誰かの「やってみよう」という気持ちをそっと後押ししてあげることにつながっているんだと思います。

◆ 「まちじゅうがキャンパス」を体感

私は開校2年目から約5年間、大ナゴヤ大学の活動の一環として「大ナゴヤ・カフェ」を開催していました。これはメンバーの「お菓子作りが得意」「なら私はコーヒーを出したい」「ウェイターなら手伝えるかも」という声をきっかけに始まったものです。

大ナゴヤ・カフェを開催するにあたり、授業で知り合った先生にお願いして「コーヒーかき水」のメニューを一緒に考えたり、三重県の伊勢茶の授業に参加したメンバーが、その淹れ方を実践してくれたりしました。大ナゴヤ・カフェは、大ナゴヤ大学全体の想いが行き来する素敵な場でした。

それまで私は、「大ナゴヤ大学の月1回の授業では潜在的に出会えていないボランティアスタッフがいる」と感じていたので、授業とは異なる場をつくることで、学内の新たな



自分の企画した授業での一コマ（写真中央が筆者）

交流の場を提供できたと思っています。

私は元々コーヒーを飲むのが好きでしたが、大ナゴヤ・カフェで、お客様に提供したことで、「自分が美味しいと思うコーヒーを紹介するより、みんなに美味しいと感じてもらいたい」と思うようにシフトしてきました。

大ナゴヤ・カフェは、大ナゴヤ大学を応援してくれている仲間の経営する飲食店を借りるかたちで、何度かやらせてもらいました。大ナゴヤ大学の中で行っていた1つの活動が、まちに飛び出したことで、私にとつて「まちじゅうがキャンパス」を体感することができました。それは同時に「あなたがいたら、まちが変わる。」を実感した瞬間でした。

これからも大ナゴヤ大学の活動を通じて、まちと関わり合っていきたいと思っています。